

笠島 武 座長 (第二病理)

14. 小児結節性硬化症の生検皮膚の病理組織学的検討

齋藤加代子・原 美智子・岡田 典子・福山 幸夫 (小児科)  
豊田 充康・笠島 武・梶田 昭 (第二病理)

15. 回盲部の X 線解剖よりみた生体における正常所見の考え方

石原 純一・木口 富恵・鈴木 葉子 (第二病院放射線科)

16. Phenobarbital の鶏胚における催心奇形性の検討

西川 俊郎・梶田 昭 (第二病理)

金井 孝夫 (実験動物中央施設)

17. 剖検例500例における Kinetic cell death の発生頻度

寺岡 邦彦・武石 詢・豊田 智里・金田 良夫・岩崎 智彦 (第一病理)  
金子 昇 (心研内科)

閉会の辞 豊田 智里

1. 卵巢中胚葉性混合腫瘍の2例

(産婦人科) 滝沢 憲・楊 端銘・  
井口登美子・武田 佳彦

(放射線科)

後藤真喜子・大川 智彦・池田 道雄  
(第一病理学) 金田 良夫・武石 詢  
(病院病理科) 相羽 元彦・平山 章

我々は、極めて稀で、予後が著しく不良な卵巣原発の中胚葉性混合腫瘍(MMT)を2例経験した。1例は65歳 OGOP で45歳に子宮筋腫で腹式子宮全摘術を受けている。もう1例も67歳 OGOP で52歳に子宮腔上部切断術を受けていた。2例とも成人頭大の骨盤内腫瘍があり、その表面にS状結腸・回腸などが癒着した進行期III期の原発性卵巣癌で試験開腹術におわった。1例目は試験切除標本からは未分化腺癌とされたが、剖検摘出卵巣を検討した結果未分化腺癌と未分化肉腫より成るMMTと診断した。上皮成分は異型性の強い細胞が腺腔を形成していたが、非上皮成分は小型で紡錘型をした細胞を主とし、異型性が極めて強かった。2例目の上皮成分は、CA125染色陽性で、腺腔状、シート状、乳頭状及び孤立散在性に存在しており、類内膜癌と未分化腺癌の混在型とした。非上皮成分は、Vimentin, Myoglobin 染色陰性であり、未分化肉腫とした。以上2例の臨床像、病理所見を供覧する。

2. 大腸癌の初期像について

(消化器病センター外科)

○五十嵐達紀・長廻 紘・  
鈴木 博孝・浜野 恭一

大腸癌の発生母地を検索するためには、その微小病変を検討する必要がある。そこで、1983年より2年間の大腸癌切除標本に1%アルシャン・ブルー染色を行

ない、非癌部を詳細に観察し、10mm未満の病変を拾い上げ、内視鏡的ポリペクトミーにて得られた標本と対比した。切除標本よりの10mm未満の病変は16病巣で、ポリペクトミーは35病巣であり、以下の結果を得た。①大腸癌の初期像は、無茎隆起性病変もしくは陥凹性病変が大部分を占め、その1/3がsm癌であることより、極く初期の病変のうちに深部浸潤することが示唆された。②最大径が5mm未満の病変があった。③腺腫を合併しないde novo cancerと思われる病変が5個認められた。

3. 外耳道色素性母斑の2症例

(耳鼻咽喉科)

○高山 幹子・石井 純子・石井 哲夫

色素性母斑は良性腫瘍であり、腫瘍細胞としての母斑細胞はその原基としてneural crestであるとされている。これはneural crestからmelanocyteとschwann細胞に分化する際の中間の未分化な細胞に相当する。

外耳道に発生する色素性母斑はまれであり悪性化するものもある。我々は外耳道に発生した色素性母斑の2症例を経験したので報告する。

症例は25歳の女性と50歳の男性でいずれも右外耳道入口部に黒褐色の表面に凹凸のある弾性硬の腫瘍を認めた。腫瘍は全身麻酔下に切除を行なった。

病理組織学的には、ヘマトキシリン・エオジン染色で真皮内に浸潤性にメラニンを含んだ母斑細胞を認めた。さらにFontana-Masson染色でメラニンが黒く染色されることを確認し、鍍銀染色では黒く染った膠原線維を認めこの線維に囲まれた母斑細胞の分布状態も観察された。